Noisette プレス Press

現地在住ライターがリアルなパリをお届け

Nov. 2026 | 11
Numéro 154



Apprendre à lire, c'est allumer un feu.
読むことを学ぶのは、火を灯すことだ
photo by Saori

Français 突撃インタビュー

今月のお客さま
クサヴィエ・ヴィエルメ さん

日越仏、3か国に思いを馳せる アジア在住30年の元フランス外交官



アジアに30年以上在住してきたクサヴィエ・ヴィエルメさんは、仏サン・マロ出身、29歳で国際協力の仕事を目指して仏語教師から転身、仏外務省の外交官として東京で4年過ごし、その後ベトナムで長く過ごされています。大学や研究所での仏語教育と文化交流活動の傍ら、大好きな俳句作りを続けているクサヴィエさんに、今回は日本・ベトナム・フランスの3か国へのそれぞれの思いを伺いました。

仏医学の影響が色濃い ホーチミン

✦現在のホーチミンには、フランスが統治していた影響はまだ残っていますか？

現代とフランス統治時代を比較するのは難しいでしょう！フランス領時代、フランス語はベトナム人に「押し付けられた」ものでしたが、戦後1980年代にはベトナムの中学校でフランス語が外国語として学ばれ始め、90年代にはベトナムでの仏語教師育成に、フランスが多くの投資をしました。でも今のベトナムの若者は韓国や米文化に惹かれていますね。私の学校の生徒でさえ高校の廊下では英語を話しますし、ホーチミンはフランス語をあまり耳にしない国際都市になっています。

✦故郷サン・マロとホーチミン、どちらが住みやすいでしょうか?

これも難しい質問ですねえ！サン・マロは海辺の歴史ある街で観光客もたくさん来ますが、ここでの暮らしは素晴らしいです。若い頃は海でセーリングをしたり、自転車で学校に通って、市場で新鮮な魚を買うのが楽しみでした。自然が美しく、サン・マロの人たちは潮の満ち引きや季節のリズムに合わせて生きている気がします。ただ高齢者が多く、街は少し活気に欠けているので、東京やホーチミンの元気な生活に戻ると若返った気がしますよ！

✦ホーチミンでの暮らしはどうですか？

自然が少ないと感じることもありますが、この大都市の魅力のひとつはカフェ文化です。数の多さだけでなく、それぞれのカフェがとても美しく、工夫されています。異国風の装飾や、鯉が泳ぐ池、花に囲まれた石庭、竹の間のハンモックなど、洗練されたスタイルが楽しめます。日曜の午前中には家族連れがベトナムコーヒー（エッグコーヒー、キャラメルコーヒー、カフェ・スアダーなど）と、ボリュームたっぷりのブランチや、マンゴーやアボカドなど南国の果物を使ったスムージーを楽しみます。何よりも、ここでは時間をゆったり過ごせるのが魅力です。

✦ホーチミンでフランスを感じられる場所はありますか？

フランスの存在感は、郵便局、大聖堂やフランス総領事館など部分的に保存された植民地建築に今も残っています。また、ベトナムには昔からずっと仏医学の強い影響がありました。実際、市内の3つの通りには有名なフランスの医師や研究者*の名前が付いていますし、仏人医師らが発起人となった仏越病院（FV）も評判が良く、健在です。さらに、フランスの評判が名高いのはガストロノミーの分野でしょうね。ベトナムの中産階級は毎月新しい「星付き」フランス料理店に出かけ、若者はフランス料理やホテル学に惹かれています。他にもフランスは多くの分野でベトナムとの友好関係を強化してきました。

フランスの詩人は「おしゃべり」過ぎる?!

✦日本についてはどう思っていますか？

10代の頃から「恋」していた日本に赴任できたのはラッキーでした。私の日本への愛は、日本文学、特に松尾芭蕉、与謝蕪村、小林一茶の俳句に魅了されたところから始まったんです。わずか3行で儚い「瞬間」を表現し、一瞬の感情が感覚によって引き起こされること。そして鳥の鳴き声、布の色、海の音などの光景が句のなかにギュっと詰まっている。「侘び寂び」の感情を数分で捉えるなんて！フランスの詩人たちはとても「おしゃべり」で、気持ちを表現しすぎます。

✦ご自身で俳句を作られると聞きました。

ええ。私は2年に一度伊豆半島を訪れるのですが、美しい風景の前で立ち止まり、インスピレーションを受けると、言葉が自然に浮かんでくるんです。そして民宿の中で何時間も言葉を練り直すんです。過去10年間で約50本の俳句を書きましたが、自信が持てず、出版する勇気がありませんでした！私の俳句をひとつ紹介しますね。

Premier matin de printemps
Même mon ombre
Est en excellente santé

春の朝　我が影さえも　すこやかに

✦今後、やってみたいことを教えてください。

来年にはリタイアするので、フランス、ベトナム、日本の間で人生を整理するつもりです！大学での文学の講義や、観光地から離れた場所で長期間ハイキングにも行きたいですね。日本語がちゃんと話せることで、いつもいろんな人と出会いがあるんですよ！ほら、私は幸せな男です！

*アレクサンドル・イェルサン（ベトナムに帰化した細菌学者、ペスト菌の発見者として有名）、マリー・キュリー（放射線治療のベトナム導入の基礎を築いた科学者）、アルベール・カルメット（サイゴン・パスツール研究所の初代所長）

毎週土曜日あさ9時30分から、テレビ朝日で放送。 tv asahi 5ch 地デジ



食材ひとつに、多彩なドラマ。
毎週土曜日に放送中の「食彩の王国」は、身近な“食材”たちが主役。
さまざまな食材が織りなす食文化の歴史や産地の風土…。
そこに流れる時間をひも解くことで、人と食材のかかわりを探っていきます。

食彩の王国



語り 薬師丸ひろ子
番組ホームページ www.tv-asahi.co.jp/syokusai

［制作］tv asahi テレビマンユニオン ViViA ［企画協力］ビデオプロモーション 提供 TOKYO GAS

マダム愛のわたくしミ♥ユラン

第154回

あの人気ミシュラン店のワインバー

「元」祖・パリで最も予約が取れないレストラン」として一世を風靡!?し、見事ミシュラン一星に輝いた名店「Frenchie」。今回は、その「Frenchie」がセカンドとしてOPENした、本店のすぐ向かいにある大人気のワインバー「Frenchie Bar a Vins」へお邪魔してきました。人気店の系列でワイン専門のお店、しかも向かいにあるとなると、お店の個性を分けるためにもお料理はさぞかしワインを意識したつまみ系かなと勝手な想像をしていたのですが良い意味で期待を裏切られました。

こちらで頂けるのは、驚くほど軽やかで洗練された、ワインなしでも楽しめるようなお料理だったのです。新鮮なタルタルを香ばしいトーストにのせた一品や、サクッと軽い生地にフレッシュなトマトと削りたてチーズを合わせたタルト、レタスで巻いて味わう香ばしいポークなど、見た目も華やかで食欲をそそられます。どれも重たさが一切なく、素材本来の旨味を引き立てたあっさりとした味わい。主張しすぎず、主役であるワインの風味を優しく引き立ててくれる、寄り添うようなお味のお料理達。お店もパリらしい風情と活気に満ちていて雰囲気も抜群。ただ、人気のお店なので予約は不可。直接行っても席が空いていないこともしばしば。でも、回転も早いので待っていれば入れる可能性は高いし、待つ価値ありですよ。日曜日もopenなので知っておくと便利です。星付きシェフの感性が光る軽やかなお料理と美味しいワインで、パリの夜を優雅に締めくくってみてはいかがでしょうか？

A. 小さなお店で椅子もバー専用の高めの椅子なので居心地はそこまで良くはないけれど、雰囲気は抜群です。 **B.** 酸味強めのタルタルは白や泡に合いそうに仕上がってます。 **C.** どれもポーションは少なめ。小さくシェアできて、女子会とかにも重宝しそうだし、食事前や食後の一杯での利用にも便利そう。 **D.** この通りにはFrenchie 系列の店が3店舗あるんです。全部美味しいしコスパも悪くないので、迷ったら行ってみると良いかも。











今月のハート

料理	♥♥♥♥♡
ドリンク	♥♥♥♥♡
サービス	♥♥♥♥♥
雰囲気	♥♥♥♥♡
コスパ	♥♥♥♥♡

Frenchie Bar a Vins

6 Rue du Nil 75002 Paris
http://www.frenchie-bav.com

writer マダム愛

東京で知り合った仏人男性に連れ去られ、気が付けばパリジェンヌとやらに。パリのレストランと生活、2つのブログを書いてます。

blog マダム愛の徒然パリ日記
http://www.paris777.blog.fc2.com/

blog マダム愛のアパートの鍵貸します
https://www.madameai.com/

癒し系フランス男子ギョームの

パリで茶柱シルブプレ

お茶のまち静岡市を駆ける

静岡お茶の旅の締めくくりは、2024年全国茶審査技術競技大会（闘茶会）で個人優勝をされた和田長治商店3代目の和田夏樹さんと。出会いは、2023年11月のヴォージュ広場での展示会。静岡市の茶商・茶師たちが集まり、静岡茶を試飲し説明を直接聞ける貴重な機会でした。



和田夏樹さんと一緒に。

まずは、1934年創業「茶商マルカ製茶」へ。仕入れる／仕上げたお茶を念入りに観察するための空間「拝見場」の隣には、昭和59年版の静岡市茶業組合の電話番号表も。次に茶町KINZABUROの看板スイーツ「茶っふる」を手に、和田長治商店へ。隣接する工場では、ここでしかみられない「炭火仕上げ」の火入れ機と、昔ながらの大きな篩も。そして静岡茶のかき氷「茶氷」をいただきに、創業70年の森田製茶が営むカフェ「茶の芽」へ。1956年開業の静岡茶市場では、茶商たちのロッカーと茶葉を観察する黒いテーブルがずらり。最後は、1848年開業の老舗茶商「茶屋すずわ」へ。娘が赤いだるまさんを楽しそうに隠している隣で、6代目渥美慶祐さんと和田夏樹さんと日本とフランスのお茶事情をお話しできた貴重な機会でした。



茶屋すずわさんにて。

writer ギョーム・ユルポー

パリにある日本茶専門店「CHANOKI」店主。日本留学中に小笠原流煎茶道に出会い、その奥深さにハマる。お店では日本の農家から直接買い付けたこだわりの茶葉が味わえる。 Instagram @chanoki_paris HP https://www.chanoki.fr/

パリに暮らす猫パリにゃん・リリちゃんと
ゴキゲン指揮者キョーリのほのぼの生活

パリにゃん通信

ダンケシェーン！



アブリコ合唱団、ドイツに参上！パリからTGVで約3時間のところにあるカールスルーエで日独合唱団デア・フリューゲルと一緒に演奏会を行いました。彼らと一緒に演奏会をするのは３回目。１回目は12年前にアブリコがドイツへ。そして6年前のコロナ直前にパリで、そして今回は再びアブリコがドイツへ行ったのです。実は、フリューゲルの指揮者のマッキー先輩は同じ高校の音楽コースの一つ上の先輩。SNSで再会し、お互い日仏・日独の合唱団を創っているのを知り、今や姉妹合唱団として交流しています。毎回、日仏独の友情が育まれる温かい演奏会になるのですが今回のドイツ公演は格別でした。合同で歌った「大地讃頌」は鳴り止まない拍手にスタンディングオベーション！コンサート後は本場のビールで乾杯し、次の日は市内を案内してもらいみんなで動物園やお城でトロッコ電車に乗ったりと最高の思い出になりました。一度でも一緒に歌ったらもうかけがえのない仲間になれる。そう、これが合唱の魔法なのです！

writer 押田杏里（きょうり）

日仏混合アマチュア合唱団「パリ・アブリコ合唱団」を主宰する指揮者。パリで猫のリリちゃんと旦那様と「今を生きる」をモットーに暮らしています。 Instagram @abricotp

とびこめ！ミュゼのとびら

今更聞けないフレンチアート

王の宮殿から人々の美術館へ ユベール・ロベールが描いたルーヴルの未来

画面の奥へと長く続く壮麗な回廊。高い天井から自然光が降り注ぎ、壁面には数多くの絵画が並んでいます。作品を鑑賞する人々や、制作に励む画家たちの姿も見えます。1796年、ユベール・ロベールが描いた《ルーヴルのグランド・ギャルリー改造計画》。古代遺跡や想像上の廃墟を描くことを得意としたロベールは、実際の建築や庭園の整備にも関わりました。1784年には王室絵画の管理職に任命され、王政時代からグランド・ギャルリーの整備計画に携わり、革命後も美術館の運営や展示空間の整備に関わります。

ルーヴル宮を美術館として整える構想は、革命によって突然生まれたものではなく、王政下の計画が、革命を経て公共の美術館事業へと引き継がれたのです。1793年開館後も展示空間の整備は続き、この絵は、すでに開館していた美術館をより良くするための提案として描かれました。

注目は、天井から取り入れられた自然光です。当時のグランド・ギャルリーは、主に側面の窓から光を取り入れる構造でしたが、ロベールは天井に採光用の窓を設け、絵画をより見やすくする空間を提案しました。この構想は、19世紀のナポレオン3世時代に実現します。現在のグランド・ギャルリーは構想そのままではありませんが、ロベールの理想の一部が、長い年月を経て形になったものです。

画面右側には、絵筆を手にするロベール自身の姿も。美術館は鑑賞だけでなく、画家が名画を模写し、技術を学ぶ場所でもありました。美術館を人々に開くとは、単に扉を開くことではありません。作品を守りながら、鑑賞や学びのための環境を整えることも大切です。230年前に描かれたロベールの構想は、芸術を未来へ伝え、社会と結びつける美術館の役割を、今も私たちに問いかけているようです。



『ルーヴルのグランド・ギャルリー改造計画』ユベール・ロベール／ルーヴル美術館／写真：Wikimedia Commons（Public Domain）

writer 妹尾優子

仏語教師の傍、仏文学朗読ラジオ「Lecture de l'après-midi」の構成とナレーションを担当。美術史＆日本史ラブ。日仏の文学からアートまで深堀りする日々。

HP https://note.com/tabichajikan/m/md750819c9bc7

仏人添乗員リラの

日本リラ散歩

街が舞台になる日

数年前から、秋になると楽しみにしているイベントがある。10月に東京で2日間開催される大道芸のフェスティバルだ。いつも見慣れている街が、普段とは違う特別な空間に変わり、自然と人が集まってさまざまなパフォーマンスを自由に楽しむ。街をぶらぶら歩きながら、気になるショーを見て回るのも、このイベントの楽しみの一つだ。



2009年にフランスで見た大道芸

東京で大道芸を楽しんでいると、昔フランスで見た大道芸の懐かしい思い出もよみがえる。国が違っても、パフォーマンスを通じて人を感動させたり、観客を一つにしたりできるところも、大道芸の魅力の一つだと思う。

フランスには、街全体が舞台になる大規模な大道芸フェスティバルがいくつかある。その中でも有名なのが、オリアック国際街頭劇フェスティバル（Festival International de Théâtre de Rue d'Aurillac）だ。実は、私が小さかった頃、両親がこのフェスティバルでフードトラックの仕事をしていたことがある。自分自身の記憶はないけど、いつかまた訪れてみたい場所の一つだ。

また、子どもの頃には、なぜか知り合いのサーカス団の家族と一緒に1か月ほど生活したこともある。改造されたトラックの中で寝起きし、大きなテントを張って、夜にはショーを開く。そんな生活がとても新鮮で、ちょっと憧れでもあった。当時通っていた学校の先生は、「休んでもいいけど、戻ってきたらサーカスについて発表してね」と、条件付きで休みを許可してくれた。細かい記憶は曖昧になってしまったけど、楽しかったことと、1か月の経験をまとめたことは、今でもぼんやりと覚えている。

パフォーマンスを見ると、いつも心が弾む。そして、大道芸とは少し違うけど、ずっと挑戦してみたいと思っているポールダンスへの憧れも、再び湧いてくる。来年こそ、実現できるかな？

writer リラ

東京で翻訳者としても活躍する30歳のフランス人女子。持続可能な社会の実現に向けての活動もする。趣味は編み物とベランダの植物の世話。

トモクンの

アレコレ、パリコレ、ナンダコレ〜

高校生による健全な示威行動だったのに…ヨーロッパを揺るがしかねない一大事に

9月中旬から始まり、フランス全土に広がった高校生によるデモ行進。校舎の老朽化や教員不足による長期に渡る授業の休止についての改善を訴えていましたが、左派勢力や黒づくめ集団が合流し、事態はあらぬ方向へ進んでいます。

10月8日のこと。友人宅での夕食会のために最寄り駅から地下鉄に乗ろうとしたら、シャッターが下りていて乗れず。バスでリヨン駅へ移動したら、何とデモ行進の真っ最中でした。遠くに煙が立ち上っているのが見えます。急いで地下鉄1番線に乗ろうとしたら、地下道の入り口から人々が引き返して来ます。そして、奥から煙が…。催涙ガスでした。鼻の中に激しい痛みを感じつつ、必死に逃げて14番線に乗って事なきを得ましたが、あんな経験は32年間パリにいて初めて。

10月12日にパリを発ち、日本に戻ったのだけれど、その5日後のデモ行進は物価高への不満を訴える人々が加わり、最悪なものとなりました。黒づくめ集団、いわゆる壊し屋たちが高級ブランドのブティックやスーパーなどの店舗を襲い、略奪を繰り返したのです。多くのメディアは、移民たちの仕業としていますが、その実、世界のシステムを壊して統一させようとするグローバリストたちが仕向けていて、特別に養成した壊し屋たち、クライシスアクターを投入しているという説を唱えている人もいます。ゴリゴリのグローバリストであるマクロン大統領にとって、今回の暴動は都合が良いはずで、敢えて無策を続けている点を考えると納得できなくもない。黒づくめ集団＝移民という考えは早計なのかもしれません。世の中って複雑。

初々しい高校生たちの訴えを示すための純粋なデモ行進は、一般人を巻き込んで肥大化し、ヨーロッパ各国に飛び火しています。11月には、再びパリで大規模なデモ行進が予定されているそう。ヨーロッパの病人と化した財政難のフランス政府にとって、高校・物価高の早期改善は不可能で、簡単には収束しないはず。年内は混迷を極めること必至です。近くパリ旅行を計画している方は、取り敢えず諦めた方が身のためかもしれません〜。



writer トモクン

トモクンという名の45歳。在仏27年。ファッションジャーナリスト（業歴17年）は仮の姿で、本当はただの廃品回収業（業歴5年）。詳しくはブログ『友くんのパリ蚤の市散歩』にて。

blog 友くんのパリ蚤の市散歩

http://tomos.exblog.jp

フランスおバカニュース

ナルボンヌの薬局でオンライン診療の予約を入れた男性、時間が遅れ診察を終えたのは19時50分。店内は真っ暗で閉じ込められた。救急隊に連絡したが薬剤師と連絡がとれず彼は窓を割って脱出、薬局で一夜を過ごすことは免れた。

編集長 吉野亜衣子の

毎日N.Y.で困ってます



パリジェンヌからニューヨーカーへ
アラフォー女・怒涛の365日戦争

第32回

「バルーンってなんだっけ？」ニューヨークで迷い込んだ謎のBalloon Museum調査報告

以前、友人とニューヨーク三大アホアホミュージアム（以下、AMNY）決定した後「また新たなAMNYができたかも」と一報が入りました。今回の調査対象はバルーンミュージアム。マンハッタンの南端、先日までフランス人シェフがプロデュースのフードコートだった場所に誕生したのですが、オープン告知してからなかなかオープンしなかったり、広告のリンクされたサイトで買えなかったりポンコツな運営に不安を覚え、AMNY調査団の妖怪アンテナがビンビン反応したわけです。

今のテーマはDAYDREAM。夢、みせてもらいますよ〜と入った最初の部屋は巨大バルーンがギュウギュウ小部屋。風でバルーンが動き回っていて子ども達は大興奮。ガチャンガチャン音が鳴るので何事かなと見回すと天井からぶら下がった裸電球にバルーンが当たって天井とぶつかる音であった。割れる、絶対に数日以内に割れる。これは悪夢かもしれないぞ？



▲天井のランプを打ち付ける風船たち。最もバルーンを感じた空間



▲「なんて楽しいの!私の人生でベストミュージアムよー!」と叫んでいるお母さんがいて驚愕

足早に次の部屋に子ども達を移動させるとスピーカーから音が鳴ると膨らむシャボン玉ルーム。子ども達は飛んでくるシャボン玉を叩き割ることに興奮。割れた時の飛沫が皆の顔やら手やらにびちゃびちゃかかって母さん心配。

進んでいくうちに小鳥メリーゴーランドが突如出現。10分くらい安全確認したわりにLALALA LOVESONGの最初のサビが歌い終わらないくらいで終わった。久保田、きっと消化不良。休憩所なのかも。バルーンがわからなくなったころ、入り口でヘッドホンを渡されて入ったのは、紙吹雪とアロエみたいな植物の森です。音楽何が流れるのかな?とワクワクしていたら何も始まらず終了。ヘッドホン外したら轟音で、紙吹雪の扇風機の音を消すためのヘッドホンでした。紙吹雪の量はすさまじく、紅白歌合戦のお神輿の上の北島三郎の苦労を思い知ることができました。ヘッドホンで「祭り」をかけてほしかった。

丸いランプがつるされて音楽に合わせて上下するのを周りのブランコで揺られながら見るスペースで締め。視察を終えて、審議を重ねるAMNY委員2人「バルーンってなんだ?扇風機か?」バルーンの意味を調べてみたら「気球・風船・尿道に入れるもの」尿道だったのかな——。

writer 吉野亜衣子

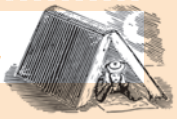
ラジオ局を辞め、夫の留学についてパリへ。帰国後、日仏文化交流のための NOISETTEを設立。2022年で設立10周年。2024年春よりNY在住。

HP https://note.com/noisettepress

podcast https://podcasters.spotify.com/pod/show/cafenoisette

本ソムリエ・ムッシュプルドンの

トレビアン・ブックセレクション



「この生き物」を探求する

この夏に、九州国立博物館で『氷河期展』が開催された。展示会のポスターには、この先史時代を代表する3つの種——マンモス、ホモ・ネアンデルタレンシス、そしてホモ・サピエンス——が取り上げられていた。この展示会で2種類のホモの頭蓋骨が見られることを知っていたので、冗談めかして息子に「僕らの祖先たちを見に行こう」と誘って、一緒に行った。この展示会を見た後、ネアンデルタール人についてもっと知りたくてこの本を読んだら、衝撃な事実が待っていた。

ちょうど夏に、人間の遺伝子の歴史に関する『遺伝子の長旅』（仏：L'odyssée des gènes）という本を読んでいた。その本によれば、人類全体が遠い共通の祖先を持つため、遺伝的に結びついており、ぶっちゃけ人類はみな「いとこ」同士だ。また、私たちの遺伝子には、ホモ属の他の種、特にネアンデルタール人との出会いの痕跡が刻まれていることも書いてあった。こうした交雑の遺伝的痕跡や、骨格から明らかになったサピエンスと非常に似た身体的特徴から、ネアンデルタール人は「もう一人の私たち」であると見なされることが一般的だ。

『裸のネアンデルタール人
—人間という存在を解き明かす』
リュドヴィック・スリマック著・野村真依子訳／柏書房



『裸のネアンデルタール人』（仏：Néandertal nu）の著者が反論しているのは、まさにこのサピエンスとネアンデルタール人との同一視である。というのも、彼がここ30年にわたり追い求めてきたのは、人間ではなく、「この生き物」なのだ。この言葉を使うことで、彼らの人間性を軽視する意図は一切なく、むしろサピエンスとの体系的な比較から脱却したいという意志の表れである。「もう一人の私たち」として捉えていることが、逆にネアンデルタール人の精神世界への理解を妨げている。彼らの精神世界は、サピエンスのものとは、オオカミとプードルくらい、大きく異なっていたはずだというのが著者の主張だ。

息子と二人の訪問は結局のところ、祖先のサピエンスと「この生き物」への訪問だった。

writer ジャンマリー・プルドン

福岡在住のフランス人。福岡で仏語教室やフランスに関わるイベント企画を通してフランス文化普及に貢献する。Nautilus主宰。

Instagram @libr_nautilus

ご感想や配布希望、広告出稿などに関するお問い合わせは info@noisette-paris.net までお願いいたします。

日本で使われているフランス語、本当はどういう意味??

メニュー

日本語でメニュー（Menu）は献立表だけど、フランス語だとコースのこと。献立表が欲しかったら「カルト（carte）」をもらわないといけない。「メニューください」っていうとコース料理が出てくるから気を付けて。ちなみにアラカルト（à la carte）は一品料理のことで、一品だけ頼むのは問題ないけど、前菜だけだと嫌がられるから、メインディッシュから選べばOK。お友達の大食漢マダムがメインから2品頼んでたわね。

ノアゼットプレス公式ポッドキャスト
「カフェノアゼット第45回」より編集部が抜粋し要約。

編集後記

★10月からまた日本語ボランティアが始まり、てんやわんやの日々となっています。今回の学生さんは11人。みなさん優秀で、予習したいから次の授業のスライドを早くくれと言われます。私の時代の大学生では考えられない真面目さ!日本をもっと好きになってもらえるようにがんばります。（編集Y）★ボルドーの名所「水鏡」に168人のダンサーが集結、フレンチカンカンのショーが行われたとか。私もスカートを振り回して踊りたい〜!（AD.F）





Noisette Press
発行元：ノアゼット東京オフィス
http://www.noisette-press.net/
編集発行人：吉野 亜衣子　編集：小橋 桜子
アートディレクション：藤原 結花(yap)